

## 2. タイ類放流技術開発試験

① 本題「放流技術」

藤本 裕、多和田真周、新垣盛敬

ミナミクロダイは本県各地の沿岸で周年に亘って漁獲され、魚価も比較的高く、漁業者からその増殖が強く望まれている。

またマダイは、我国の有用水産魚類の中でも極めて高級な部類に属することは周知の事実であるが、本県では尖閣列島近海で漁獲されるだけである。

沖縄本島中部では移殖されたマダイが周年生存することが知られており、もしマダイが沖縄本島を始めとする琉球列島で増殖可能であるならば、本県の水産業に新たな一面をもたらすことが考えられる。

以上の2種を中心に、本県の有する広大な礁湖内浅海水域を有効に利用するため、タイ類の放流技術開発試験に着手した。

なお詳細は、昭和54年度指定調査研究報告書(増養殖部門)に報告したのでここでは概要にとどめる。

### 要 約

- ・ミナミクロダイ親魚に魚病の発生が認められ採卵ができなかった。今後安定した採卵を可能にするため、魚病の原因を明らかにし発生を防ぐ必要があると考えられた。
- ・広島より輸送し飼育を継続していたマダイ親魚は産卵が認められなかった。原因については明らかではないが、輸送による魚体の疲労、水温等の問題が考えられた。
- ・マダイふ化仔魚(ふ化直後)輸送の結果、生残率75%であり、ふ化仔魚輸送に関する大略の見通しを得ることができた。
- ・マダイ仔魚飼育の結果、ふ化後24日、平均尾叉長11.58mmまでは歩留11%であった。以後屋外水槽で飼育を継続したが、餌料の問題か、あるいは連日30℃近い高水温のためか多数ピンヘッド状の魚が出現しふ化後40日目より斃死魚が多数認められた。
- ・マダイ稚魚(平均尾叉長25.5mm)の塩分濃度変化耐性試験の結果、比較的塩分濃度変化の激しいと考えられる伊良部、下地島水路部での一般的な変化に対しては生存可能であることが分た。